

## コロナ禍の技師会事業を通じて見えたこと

### ～技師会事業および会員意識の変化と今後～

◎田中 真輝人<sup>1)</sup>、鈴木 雄太<sup>2)</sup>、岩崎 澄央<sup>3)</sup>、和田 妙子<sup>3)</sup>、岡田 一範<sup>4)</sup>、米澤 仁<sup>1)</sup>、近藤 啓<sup>5)</sup>、木田 秀幸<sup>6)</sup>  
札幌医科大学附属病院<sup>1)</sup>、医療法人 徳洲会 札幌徳洲会病院<sup>2)</sup>、北海道大学病院<sup>3)</sup>、学校法人 日本医療大学<sup>4)</sup>、北海道医療大学<sup>5)</sup>、  
社会医療法人 北楡会 札幌北楡病院<sup>6)</sup>

【概要】札幌臨床検査技師会（以下、札幌技）は、会員数約1,600名を数える国内でも有数の人数を誇る地区臨床検査技師会である。「会員に一番近い技師会」を目標に、講習会事業を中心に様々な活動を行っている。コロナ禍は、技師会事業やそれに対する会員意識に少なからず変化をもたらした期間であった。本演題では、コロナ禍における当会の活動を振り返り、その間技師会事業や会員意識がどう変化したのかを考察し、今後の取り組みについて述べる。

【活動内容】コロナ禍初期の2020年は、ほぼすべての活動が停止を余儀なくされたが、当会会誌の発行（年6回）や札幌市医師会夜間急病センターへの協力事業（年中無休）については継続的に実施した。2021年は、講習会事業の開催様式変更（対面→Web）など様々な制約がある中で各種事業を行った。同年10月には、第70回北海道医学検査学会を、コロナ禍で初めて対面（+Web）で開催し、当会として今後の事業を展開していく上で、大きな転機となった。2022年からは、原則「対面開催」を目標に、コロナ禍初期より継続してきた事業に加えて、感染対策に十分配慮しな

がら、各種講習会・市民啓発・会員親睦事業を実施した。新型コロナウイルス感染症が5類に移行した2023年以降は、各種事業への参加者数はコロナ禍前と同程度まで回復した。

【考察】コロナ禍では、Web開催の普及により生涯学習が受動的となり、また、施設間の繋がりが疎遠化するなどの弊害が生じた。一方、講習会のWeb開催は参加が容易であるなど利点も存在し、その要望が今なお一定数存在することから、特に会員意識に変化があった部分であると示唆された。しかし、当会は上記弊害がもたらす中長期的な影響を強く懸念し、極力各種事業の「対面開催」を目指した。その結果、コロナ禍において減少が予想された、学会や講習会での質疑応答などの能動的な研鑽や、その他各種事業を通じた施設あるいは分野間のコミュニケーションが従来通り活発に行われ、札幌技会員に大きく貢献できたと思われる。

【結語】今後も、「会員に一番近い技師会」として、役員一同で「会員のための活動」を実施していく。

連絡先：011-611-2111（内線：36430）